

「関西・宮沢賢治の会」再興によせて

比叡山延暦寺 副執行・参拝部長
横山 照泰

はじめに

前会長の平澤農一氏が亡くなり、2～3年寂しい想いをしていたが、幸いにして関西岩手県人会がバックアップしていただいて、「賢治の会」が無事再興なったことは大変喜ばしいことです。関係の方はさぞ大変だったと思いますが、これからも一人でも多くの会員を募って、さらに活発な活動をしていただきたいと思います。



1. 比叡山における賢治歌碑建立の奇跡

毎月1回発行の「比叡山時報」というのがあります。昭和32年12月号(1957.12)を見ると、同じ年の昭和32年9月21日(1957.9.21)に、ちょうど今の場所に、「根本中堂、ねがはくは 妙法如来正徧知 大師のみ旨 成らしめたまへ」という賢治の歌を刻んだ碑が建立された、と書かれております。昭和32年というと、もちろん私はまだ山に入っておらず、当時はまだ小学生で、まさか比叡山に来ることなど思いもしなかった頃です。奇しき縁をいまさらながら感じていますが、その前の年の昭和31年12月11日(1956.12.11)に、比叡山に何があったか、と申しますと、賢治さんとは全く関係ないが、「大講堂炎上」、大講堂が焼けてしまうという、比叡山にとって一大事があったのです。それから1年も経たずに、あの賢治歌碑が建立されたのは、全くの奇跡としか云いようがない。

何故かという、「大講堂の炎上」によって比叡山はそれどころではなかったのです。当時の執行部は当然解散している。一山の住職は30～40人はいたと思うが「総懺悔」で、全国をくまなく廻ってお詫びの行脚です。と同時に大講堂の再建に向けて「請願」に廻っているのです。



宮沢賢治 歌碑

そんな状況の中で賢治歌碑が建立されたこと、しかも根本中堂の真ん前という、これ以上ない良い場所に建立されたことは、まさに奇跡である、と私は思います。

このことは、ひとえに歌碑建立の発願人で、私の師匠である葉上照澄上人(延暦寺長藤大行満大阿闍梨)の宮沢賢治に対する「熱き想い」、一念が通ったことに他なりません。

2. 葉上照澄上人と賢治のご母堂

私が何故「宮沢賢治の会」に関わってきたかという、それは私の師匠の影響です。師匠は40歳半ばにして比叡山に入り、千日回峰行を達成した方です。千日回峰行というのは、一日30キロの行程を一日も休まず礼拝して廻る行で、過去に成就した人は数えるほどしかいない厳しい行です。拝む場所は250箇所以上、その対象は山門仏閣は勿論、はるか遠い伊勢神宮、熱田神宮、更には



延暦寺会館研修室での講演風景

九州の大宰府天満宮とかを拝んでゆく。あるいは大きな岩、大木、ありとあらゆる物が礼拝の対象です。「但行礼拝(たんぎょうらいはい)」、つまり礼拝行です。これは、約千年前に、「相應和尚」が、ここから2～3キロのところにある無動寺から根本中堂のお薬師さんに、毎日お花を供えに通われたことが始まりとされています。法華經の第二十品「常不輕菩薩品(じょうぶぎょうぼさつほん)」の中に、常不輕菩薩がありとあらゆる物にも仏の姿を見出して礼拝し続けた、というところがあり、ここに回峰行の一つの根拠が見出されています。私の師匠は賢治の生き方、作品の中に、「但行礼拝」、「常不輕菩薩の行」、こういうことを交叉させて見ていたようです。

師匠の著した「願心」という本があります。昭和32年2月11日に、師匠は花巻を訪れて、賢治のお母さんに会っております。当時、賢治のお母さんは存命で80歳でした。師匠は賢治の信奉者で、若い時から賢治の生き方、作品等に相当傾倒されてきた方でした。皆さん以上に「賢治きちがい」であった。師匠は賢治のご母堂を訪ねて行った時、「きっと賢治の自慢話の一つも出る」と思っていたそうです。ところが、そんなことは一切なかった。終始、「淡々として首をうなだれて応対された」と述懐されています。その謙虚さに「この母にしてこの子あり」と大変感銘を受けたそうです。「願心」には、その他の師匠の賢治への想いが綴られています。

3. 賢治は法華經の実践

宮沢賢治については、いろいろな作品や、また、批評家の論評を通じて良くご存知のことと存じます。文学者で科学者である。もう一つは「宗教者であった」ということです。信仰を持っている作家、小説家は多くいますが、賢治のすごいところは「法華經の実践活動家」であった、ということです。いろんな作品の中で表現されている、その根底には、法華經の精神が流れている、最終的には自分の身を投げ打って、世の為、人の為に尽くしてゆく。まさにこれは法華經の真髓であるところの菩薩行なのです。「農民芸術概論」にも出てきますが、「忘己利他(もうこ・りた)、己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」と

は伝教大師の云われた言葉です」。

日蓮上人との出会いの前に、賢治は伝教大師の教え、ものの考え方を知っていたに違いない。その教えをいろんな作品の中に想いめぐらされたのだと思います。「妙法蓮華経」は八卷二十八品に分かれています。一～八巻までと前後の開経である無量義経、それから結経の観普賢経を入れると十巻になります。

法華経の教え(考え方)は「一切皆成仏」「一切衆生、悉有仏性(仏の種)」で、生きとし生けるもの全ては仏性を兼ね備えている。仏の種を宿している、と説いています。また、法華経の譬喩品に「今、この三界は、皆、これ、わが有なり。その中の衆生は、悉くこれ吾が子なり」とあります。我々は意識、感覚をもって、今、生きていることを実感することが出来る。肉体がなくなると、その後のことは分からない。しかし、過去、現在、未来はつながっている。決して今だけが全てではない。私たちを取り巻く全て、石ころ、草むら、木から全ての物、森羅万象は仏のお姿である、と。まさに、賢治は「妙法蓮華経」を作品の中で説いてこられたのです。このことは多くの研究者が認めるところです。難しい「妙法蓮華経」を作品の中に著すことは、本当に大変なことです。

今日、「雨ニモ負ケズ」の詩を朗読していただきましたが[星野祐美子氏(フリーアクトー)]、この中で説かれているのは「菩薩の姿」です。東奔西走、世の為、人の為に、たとえデクノボウと罵られようが、自分を勘定に入れずに、自分をさらけだして活動されたところが、私の師匠をはじめ万人が賢治に共感する理由なのでしょう。



国宝 根本中堂

4. 法華経と阿弥陀経

法要の挨拶で、佐々木光澄輪番(導師)が「朝題目に夕念仏」と云われていましたが、法華経の教えは、自分自身も仏であるという自覚のもとに、世の為、人の為に実践を行っていくという考え方です。それに対して浄土門の念仏は全てを阿弥陀様のお力にお縋りする。計らいを無くして、全てお任せするという事です。比叡山仏教の考え方は、法華も弥陀も一体である、という考え方です。

法華経にも阿弥陀仏の名称が出てくる。南無阿弥陀の「阿弥陀」とは固有の仏を顕していますが、「絶対」ということです。分かり易く云いますと、「仏様に身を託す」ということです。単に阿弥陀仏に帰依する、だけではなく、「絶対に阿弥陀様に身を委ねる」という大変な意味合いです。この法華と弥陀という見解については、すなわち「日蓮門下と法然門下の争い」の歴史があります。「自力聖道門」と「他力本願」の見解の相違があったのです。本来、仏教のものの考え方は、全ての存在を認め、特に法華経は「一切皆成仏」、生き

とし生けるもの全てに仏性があるという捉え方ですから、生と死は一つのもので表・裏一体の捉え方です。今の時代は、西洋近代科学文明の影響で全てを分けて考える。分析することが主流です。肉体を宿した今だけが全てではなのです。

過去、現在、未来はつながっている。我々は過去を受けこの世に誕生したのです。生と死があつての生命（いのち）なのです。ただ単に、生きている時だけが生命（いのち）ではないのです。

おわりに

「今日、関西宮沢賢治の会が再興したな・・・」と、賢治は我々の一部始終を見ているに違いない。これも法華経の中に説かれている永遠の生命（いのち）です。

皆さんは賢治の作品をたくさん読んでおられ、皆さんなりの賢治像をお持ちだと思います。どんなに小さなことでも秘めておかないで、その思いを世の為、人の為に向けていていただきたい。



2007年宮沢賢治75回忌法要

昭和31年から32年の比叡山の大変な時期にあの碑が建った。あの中に賢治の遺骨が納められている、分骨されているということを感じる時、宮沢賢治の魂は、比叡山に留まらず、東に西に、南に北に、まさに「千の風」になって縦横無尽に飛び翔けているのでしよう。

(本稿は平成19年9月21日、延暦寺会館での講演内容を加筆、修正したものです)

関西・宮沢賢治の会

〒530-0001 大阪市北区梅田1丁目3番1-900 大阪駅前第1ビル9階

岩手県大阪事務所・関西岩手県人会 (Fax 06-6344-5969)

発行代表者 小野 誠 編集代表者 深田 稔

外部からのお問い合わせ

Tel 06-6231-4301 (岩手日報大阪支社、大阪市中央区高麗橋2-4-6)